

# 「海がこんなに近くにあると思わなかった…」

千葉県旭市消防団  
本部付中隊長（分団長）

**浪川 甚一郎**（44歳）  
消防団歴 19年（農業）



千葉県旭市消防団  
第1中隊長（分団長）

**林 勝敏**（48歳）  
消防団歴 10年（会社員）



## 千葉県旭市の概要と被害状況

千葉県旭市は県北東部に位置し、九十九里浜の最北端に面しており、海水浴客でにぎわう町である。同市の面積は129.9km<sup>2</sup>で人口は6万9,496人（平成23年11月1日現在）の施設園芸、畜産、稲作、露地野菜など盛んな農業を中心に水産などの産業も豊かな市である。

旭市は、東日本大震災の地震と大津波による被害を受けて、人的被害が死者13人、行方不明者2人、負傷者12人、住家被害が全壊318棟、半壊850棟となった。

千葉県旭市消防団は、5方面隊（中隊）16分団、987名の団員で構成されている（平成23年4月1日現在）。浪川甚一郎本部付中隊長と林勝敏第一中隊長の東日本大震災時における消防団活動である。

## 発災が起きたその時（浪川中隊長）

私は農業を営んでいるので、その日も畑でトラクターに乗って作業をしていた。突然、目の前の風景がやけに揺れたため、てっきり自分の体調が悪くなったのかと思ってトラクターを一旦停止した。しかし、ワッサワッサと揺れる電柱が目に入り、これは地震だと理解した。周りにいた老人た

ちも「これはただ事ではない地震だ」と言い始めた。尋常ではない揺れであったので、消防団員として活動するために、すぐに帰宅の途についた。帰宅途中、15時頃に大きな揺れに見舞われたので、思わずトラックを止め、運転席の中でしばらく様子を見ていた。今までにない胸騒ぎを覚えた。収まるのをまってすぐ帰宅し、消防本部に出勤する準備に取り掛かった。

## 発災が起きたその時（林中隊長）

発災当日、私は普段どおりに会社で働いていた。14時46分、突然の揺れに襲われた。地震と共に停電した。仕事を一時中断し、地震の揺れが収まるのを待ち、急いで消防本部へ駆け付けた。

## 多発する液状化現象（浪川中隊長）

私たちが消防本部に着いた時、まだ少数の消防団員しか集まっていなかった。消防本部でテレビを見ていたら津波警報が出ていることに気づいた。旭市には14時49分に津波警報が出され、津波警報を広報するために、消防車が出動していた。

海岸沿いの人たちには、避難を呼び掛けていた。しかし、警報が出されても避難しようとする人は少なく、誘導のために消防車や消防士はそこ



液状化による道路崩壊

に留まり、避難を呼び掛けていた。そのため津波の第1波が来た時に、消防車などが襲われたのだった。

私達も津波の避難誘導をしようと消防団の広報用車両で出発した。途中、「市内で液状化が起こった」との連絡が入り、私達は現場に急行することにした。現場では駐車場が液状化しており、コーンなどを置いて危険を知らせることにした。このような液状化は市内の至る所で起こっていた。

旭市の地形は大昔に浸食で出来た地盤で非常に弱い地形である。また、昭和40年頃までは砂鉄採掘を行っており、その跡地を埋め立てたため、その部分が液状化を起こしやすい地盤となっていたのである。

### 津波を見に行つて…（浪川本部員）

私達は、液状化の現場を後にし巡回を続けた。そして津波警報は15時14分に大津波警報へと変わり、私達の車に搭載された無線機を介して、津波の情報が入って来た。私達は被害にあった矢指ヶ浦の海岸へ向かった。矢指ヶ浦は市内海岸の中央部に面していて、襲来した津波の一部はこの付近から陸地に沿って回り込む様にして飯岡港へと向かったと思われる。

私達が現場に着いた時、すでに津波の第1波が来ていて周辺の車が流され、建物にも浸水していた。被災者が溢れかえって、現場は混乱していた。

途中、頭から血を流してバイクを引きながら歩

く若者を発見した。自分たちの車に乗せ病院に連れて行った。後で聞くと彼は津波を見物しに行き、その時に波に襲われたそうだ。過去にも津波被害に遭っている東北地方と異なり、津波に対する危機意識が薄いので、興味半分に津波を見に行き被害に遭われた方や、津波による被害は無いと過信して避難せずに被害に遭われた方が多かった。

若者を車で病院に搬送すると病院も屋外にテントを設営するなど、被害に遭われた方を収容するなど受け入れ準備を着々と進めていた。

私たちが市内海岸中心部の救助活動にあたっている間に東側の飯岡方面に大きな津波が来ていた。飯岡への津波は、直接押し寄せる波と矢指ヶ浦の西に位置する中谷里浜方面からの波が沖で重なり合って、飯岡へ甚大な被害を起こす非常に大きい津波となった。

### 津波に流され間一髪（浪川中隊長）

病院にいた私たちの所に飯岡の津波の一報が無線が入って来た。私達は急いで病院を後にし飯岡地区へと向かった。飯岡地区はすでに津波の第1波が来た後だった。津波は、背丈ぐらいまであったそうだ。私たちが到着した時には、すでに水は引いていたものの、瓦礫等で道路が寸断され街の中に入るのが困難な状態になっていた。まだ津波警報が出されている中、車で入って行ける所までいくと、近所の住人から「まだ、あそこに人が閉じ込められている」と聞き、救助に向かった。冷静に考えると、とても危険なことだったが、その時は無我夢中だったので「怖い」とか「危ない」ということは頭になく、ただ必死で助けたかっただけだった。

旭市には、津波が第7波まで到達した。情報が錯綜していることから、次にいつ来るかわからない。時間はどんどん過ぎていった。

私たち2人は、夕方近くになっても、車で巡回し救助や捜索をしていた。再び中谷里浜地区に移動し、15時47分頃の津波に襲われた、かんぼの宿

付近を搜索していた。その付近は、津波が引いたとはいえ、まだ腿上ぐらいまで水が残っており、搜索にも困難をきしていた。搜索中に介護福祉士の方が私たちの元にやって来て「助けてください」と言ってきた。その介護福祉士は、介護利用者を送迎中に津波に襲われ車ごと流されてしまい、運よく小高い所に流れついた。車の中には車椅子のお年寄りが閉じ込められていて、津波でエンジンをやられてしまった。車内には車椅子がワイヤーで固定されていて、エンジンをかけないと固定が外れないワイヤーなのでお年寄りを一人残し、救助をしてくれる人を探していたのだ。

私たちは急いでその車まで行くと、車の中で、車椅子に座ったお年寄りが待っていた。小高い所に流されたため水没はしておらず大事には至らなかったのだが、車のドアを開け固定されているワイヤーを見るとワイヤーカッターで切るしかなさそうである。消防団車両に搭載していたカッターでワイヤーを切断し、お年寄りを救助し避難所へ送り届けた。

水没した所を中心に搜索していたため、ずぶ濡れになり、一度消防本部に戻り作戦を立て直すことにした。消防本部では、消防団の幹部と今後の対策について協議した。そして、私たちの長い夜が始まった。

### 断水を解消すべく駆け回る（林中隊長）

市内の電気は、一部を除いて通電していたが、水道は断水状態が続いていた。そのため、避難所のトイレなどで水不足が起これ避難住民に影響が出ていた。そこで私たちはタンク車を活用し、防火水槽の水をくみ上げタンク車で各避難所を回り消防操法で使う簡易の組立水槽に水をためておき避難住民の方々が安心して、トイレが出来るようにと避難所を夜通し巡回していた。

夜中、避難所を巡回している途中で、海岸線付近で自分の両親が家に閉じ込められてしまっている。「助けて欲しい」と言う方に出会い、現場



飯岡漁港に押し寄せる津波

に急行した。その家は木などの瓦礫で玄関がふさがれている状態でとても手でこじ開けて入れる状態ではなく、消防団だけでは無理と判断した私は、すぐにレスキューを要請し常備消防と連携して救助を行った。

### 孤立したお年寄りを救助（浪川中隊長）

林中隊長が避難所の支援をしている頃、私は搜索活動の方で巡回していた。巡回している途中で23時過ぎに、「お年寄り20人ぐらいが飯岡郵便局の2階に一次避難したままで移動できないでいるらしい」と付近の方に聞いた。不確定な情報だが聞いたからには搜索しなければいけないと思い、私たちは現場にむかった。真っ暗な中、郵便局の2階からうっすらと灯りが漏れていた。2階に上がるとお年寄りが肩を寄り添い、たまたまあった蠟燭一本でトイレにも行けず恐怖の中、救助を待っていた。私たちは無線ですぐに市バスを手配してもらい、お年寄りの救助活動に従事した。お年寄りの中には、足の不自由な方もいたため団員たちはおぶって階段を降りバスへと誘導し避難所へ送り届けた。

こうして発災した日は、夜通し支援活動や救助活動を行い一度朝4時に終了して、その2時間後の6時には、活動を再開した。

### 想定外の出来ごとばかり…（林中隊長）

2日目以降、私たちは各中隊に分かれ行方不明

者の搜索や被災した家の周囲の瓦礫撤去作業などを行った。中には家がそのまま移動していたり、瓦礫で家が押しつぶされたりと、津波の凄まじさを目の当たりにした。

行方不明者の搜索については、近所の人情報を元に搜索活動を行った。活動中、瓦礫の上を歩きながら搜索したりしていたが、その瓦礫の下で一晩を明かした被災者を救助したりもした。まさに搜索活動は予想をはるかに超える想定外の出来事が多かった。また、最新式の住宅では、夜が明け太陽が昇ってくるとソーラーパネル（太陽光発電）が発電し、ブレーカーから小火が出ることもあった。

旭市では火事は少なかったものの倒壊している建物から出火するなどの小さい火災があった。大きな施設は津波に襲われ1階付近は水が溜まってしまっていたため、ポンプ3、4台を使って溜まった水をくみ上げる作業なども行った。

市内に10箇所設置された避難所は、平成23年5月には4箇所となった。避難所で足りない物資の搬送を運ぶのは、消防団の役目となった。震災当日の夜には、災害支援物資を千葉県香取市まで取りに行った。

## 被災の格差、やるせない日々

平成23年の4月に入る頃、空き家が多くなった地域には夜になると不審者などが出回るため、私たちは夜警なども頻繁に行った。また、津波で流された建物や流木などの瓦礫を片付けた瓦礫置き場では、建物の破片などからアスベストが出てしまうため、昼間には消防団が瓦礫置き場にて散水を欠かさず行っていた。

私たち消防団はこの他にも、道を早く通すために道路優先で瓦礫撤去を行っていたが、顔見知りなどに道路以外の部分も頼まれることもしばしばあった…そんな時、気持ちがわかるだけに断れない辛さがあった。

また同じ旭市内でも津波の被害にあった地域

と、まったく被害に合っていない地域との間に格差が生まれていた。被害に遭ってない人たちが津波にあった現場を見物しに来て、一刻も早く復旧させたい道路に渋滞が起こるなどの弊害が出たりしていた。私たち消防団はその交通整理にも従事していたが、なにかやるせない気持ちになった。

## 震災を振り返りながら…前進する！

今回亡くなられた方はお年寄りが多かった。時間帯も若い方が働きに出ている時間帯ということもあり、お年寄りが一人で家にいる時間だったことも要因の1つだろう。また、旭市には平成22年のチリ中部沿岸を震源とする地震の際にも津波警報が出されたが、実際には津波は来なかった。そのような経験が、避難を遅らせた原因となっていると思う。

私たちは今後この反省点を踏まえながら、防災面の対応も見直さなければいけない。今までの避難訓練にプラスして津波を想定した本格的な訓練も取り入れ、実際の避難経路などを市民に啓蒙し訓練でもその経路を歩いて行く、といった具体的な内容のある訓練をしていきたいと思っている。他にも避難所の簡易トイレや備品の使い方が分からなく、結果的に使われてないケースもあった。これは普段の訓練から使用方法をレクチャーしておかなければならないであろう。

消防団では、災害時に「自主的に動いてくれる消防団員の結束」がとても大事である。今回のような災害は、救助・搜索が時間との戦いとなる。したがって、命令を待って活動していたのでは時間にロスが出てしまいがちなので、最後は各消防団員たちの機動力と責任力に頼ることになる。私達は今回の災害を通してさらなる絆が出来、地域に密着していきながら「自分の地域は自分で守る」という気概を持ちながら消防団を務めていきたいと思う。